





山とエバル山という山があります。この祝福の山と呪いの山というものの間に、シェケムがあります。ここに立って「神様の律法を聞いて誓いをするアーメンと言え」というその場所に戻ってきた。最初のアブラハムに約束された場所に戻ってきて、そこで最後の誓いをしているということです。それがはっきりとわかるように、ヨシュアのこの後の24章のところで、ヨセフもそのシェケムに葬ってくれと言われたその葬ることが最後にも出ています。シェケムに与えるというその場所の話です。

ゲリジム山とエバル山に集まって、祝福と呪いの話があるのですが、23章はまさに祝福と呪いの段落に分かれています。最初にヨシュアが戦ったのは神様です。約束のようにその地を得ることになりました。また同じようにもう1度言うんですね。そして敵を追い払いました。それで約束されたように続けて戦ってくれますということをヨシュアが言って、「その命令に従わないならば滅び失せます」「従わないならば滅び失せます」という箇所が2回続きます。祝福の言葉、祝福していたという言い方は入っていないんですけど、「神様の約束は必ずなされます」ということを話して、この相続の地を必ず得ます。約束の地を得るということは、ここで言われていることですね。それで他の神々に仕えてはならないということなのですが、主を愛する、愛さなければならぬということから始まって、他の神々に仕えるなら…のところなのですが、それが他の国々と結婚するなら滅びる。他の神々に仕えるなら滅びるというこの二つですね。ここに入ってますね。7節で「国々と交わる神々の名を唱える」ということが、この約束の祝福を失ってしまうという呪いの方です。最初(上段)は主が戦ってくださって、約束の地を与えられました。主の教えを守って、約束を得るようにということを最初で言われていて、後半(下段)ではその約束を守らないならば滅びます、滅びますということで、地を得ること(上段)と地を失うこと(下段)が並行しているという「祝福と呪いの言葉」ということが言えると思いますので、これ(上段)がゲリジム山側、これ(下段)がエバル山側のようなことかなと思います。

13章の1節からのところに「ヨシュアが老人になりました」と1回言ってるこの時が85歳です。まだ戦いが残っていますということでその後戦いが進んでいって、23章でもう一度「老人になりました」というふうに言ってるところでした。13章ですね。これの最後のところが、23章から24章という構成になっています。この神様の証は、創世記12章の出来事からずっと始まってエジプトから連れ出しました。荒野に住んでいたけれども最後にこの戦いをして相続地を与えましたという二つの大きな出来事ということになっています。

この出だしのところがステパノ、いきなり使徒行伝に飛びますけれど、ステパノの長い証言があります。使徒行伝7章の出だしを見ると、このヨシュア24章の神様の証言と同じ出だしです。ステパノはこのヨシュアの24章の神様の証言を引用している。なおかつ、アブラハムへの約束だということで、創世記の12章を明らかに引用して、この証言をするということですので、新しい時代が始まるということですね。新しい時代が完成するという感じですね。約束が成就する時代だということの出だしに、約束の導きのアブラハムへの約束の出だしのところからの証言をしているというのは興味深いと思います。